

## 陸上王国・埼玉での勝負

今年の東部大会は、まれな台風なみの大荒れで、記録的向上は望めなかった。跳躍は強風で、器具が吹き飛ばすのを抑えて進行するような事態であった。トラックレースも風向きからして常に追い風のレースはなかった。したがって各地区の記録比較はあまり意味を持たない。本当の決戦が熊谷で始まるのだ。

## 関東へのチケット

「自己記録と春の県大会の成績は比例しない。」  
そして、「選手は秋の県新人と全く別人になっている」ということ。

これは30年、県大会を見てきた私の身をもって知る感想だ。

みな冬の間、新人戦入賞者も負けた選手も死にもの狂いで練習を積んでくる。故障する者もいるし、練習の甲斐あって好調を保つ者もいる。さらにそれを発揮できたものも、直前にスランプにあがくものもいる。当日肉離れで泣く者も数知れず見た。

バトンがこぼれ落ちる悲鳴も多々聞いてきた。

「全て円満に県大会を終えるチームは無い」のである。

## 青山の激歩



競歩は春高の伝統種目だ。ずっと入賞を続けている。しかし、関東への切符は3位まで。昨年は高島が初めてインターハイまで進んだ。後輩の青山はそれを昨年見ている。何としても3位に食い込みたい。

レースは埼玉栄の選手が一人抜き出た。ダントツで速い。あっという間に周回遅れを作り出すほど速かった。途中で大会記録更新の可能性も出たほどだ。

2位3位を狙う青山の集団は5名ほどで作られた。

一進一退の攻防が続く。周回ごとに先頭を奪い合う。  
2位集団も次々と周回遅れを作る。

競歩は過酷だ。世界大会を見ればわかるように、マラソンより身体にきつい。失神者も出るほどの競技だ。

下位を歩く選手はすでに苦悶の表情を浮かべ、ふらふらになる選手も多かった。ダンゴ状態の中から2位3位を狙うためには、5人の集団の中でトップでゴールラインを切らなければならない。かといって短距離のようにダッシュを決められる種目ではない。いわゆるロングスパートをうまいタイミングで切らなければ失速する。かなりの読み、頭脳戦になる。



観ている我々も「ああっ・・・あっ、また・・・」とストレートごとに抜きつ抜かれつの混戦に冷や汗ものだ。

ラスト一周、ここで大きな事態が起きる。  
青山がイエローカードを食らったのだ！

・・・まずい、失格になっては意味が無い！！

青山は攻めの歩行が困難になった。無念だが3人がリードを奪った。青山は懸命に追ったが届かなかった・・・



ゴール後、いかに2位争いが壮絶なものだったか、写真をみれば分かる。がっくりとうな垂れ、しばらく息を荒らしていた。

青山の無念を思って気持ちが沈んだ我々だが、ある光景を見て和らいた。顔をゆがめながら2位争いをしたグループ皆が、握手をし、肩を組み交わし互いを称えあっていたのだ。

やはり陸上競技は紳士のスポーツだ。

レースを終えた青山は3000mSCの丸山や横山の、200mの山崎を応援するためノボリを持ってスタンドに出てきた。5位入賞という見事な成績だったが、競歩は3人しか関東枠が無い。無念だろうが、そこはきちんと切り替え、チームメイトを応援する真摯な態度には好感が持てた。



## 高島と青山

青山のもとへ、私服の少年が歩み寄って来た。  
現れたのは、なんと昨年の覇者・高島だった。

しばらく二人は話し合っていた。高島も青山の競技を見ていて、レースについて語り合っていたのだろう。昨年も写真に撮っていたので、私にはよく分かるが、青山も実にたくましくなったと思った。

ちなみに青山の記録は22分44秒93だ。

高島に次ぐ春高歴代2位、  
昨年の全国高校ランキング50位あたりに  
相当するかなり高いレベルのものであった。  
すばらしいウォーカーである。



男子5000m 決勝			
5	3青山	竜太	22.44.93
6	11武藤	直幸	23.41.76
7	6鈴木	数史	23.45.16
8	13中村	柊介	23.58.70

37回 のもと齒科

その2へ

